

イエス・キリストを証するための 教会組織

使徒言行録6章1～7節
2021年7月11日
松田 基子 師

教会は、神の御子イエス・キリストが人となって、この世に生まれ、人類の神様への罪を一身に、その身に負い、身代わりの十字架に架かって、全人類の罪を償い、贖われたことに依って、神様がイエス様を復活させ、人類にイエス・キリストによる唯一の救いが与えられた、この救いを宣べ伝える責任が与えられている、信仰共同体です。この事は、生ける創造主であられる神様の、人類救済の歴史に基づくものでした。

神様の願いは、一人でも**多くの人**が、イエス・キリストによる**真の救い**に**応え**、神様に**立ち帰り**、御国への**命の道**を歩む事です。神様はそのため**に教会に聖霊をお遣わし**になり、弟子達の福音宣教の助け主、導き手とされました。その結果、イエス様が十字架に架かれた時、自分の命の危険を感じて、イエス様の許(もと)から逃げ去った、ペトロを初め、弟子達は、心から悔い改めて、聖霊の支配に、心を明け渡し、**勇氣ある人間**に変えられました。

彼らは、国家権力をも恐れなくなり、**イエス様の復活と、神の子メシア、救い主であること**を大胆に証言しました。聖霊は弟子達にそのように、イエス・キリストを大胆に証言する力と共に、使徒言行録5章12節を見ますと、

「**使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議な業とが民衆の間で行われた。**」
とあります。

聖霊は特に、ペトロを通して、神の言葉の権威を示し、病人の癒しを行われました。それによって、**多くの人々**が、

『**イエス様を神の子、メシア、救い主**』
と信じて、教会共同体に加わりました。

ところで、使徒言行録においては、イエス様の

直弟子であった弟子達は、**使徒**と呼ばれていません。使徒とは、聖書の用語解説には、

「**イエスが弟子の中からお選びになった12人。イエスの復活後は、教会の最高の職位として宣教の責任を持つ者を意味した。本来の語義は『使者』**」

とあります。

教会は、ペンテコステ以降、使徒達を中心に、聖霊の導きと、助けに依って拡大し、日を追う毎に、入信者が増えて、組織化しなければ、教会がうまく機能出来ない状態になりました。

そこで最初に出来た職制が、ペトロを初めとするイエス様の直弟子、12人による**使徒職**です。

彼らは何よりも、イエス様と寝食を共にし、イエス様の**十字架と復活の証人**でした。イスカリオテのユダの代わりに選ばれたマティアについても、その選出基準は、使徒言行録1章21、22節に、

「**主イエスが私たちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中から、だれか1人が、わたしたちに加わって、主の復活の証人になるべきです。**」

とあります。

その**使徒たちの使命**は、イエス様を**神の子、メシア、救い主と証すること**でした。

彼らはそれを何処で語ったかと言いますと、5章12節後半には、

「**一同は心を一つにして、ソロモンの回廊に集まっていた。**」

つまり、彼らは、律法に従って、神殿で礼拝をすると共に、神殿の境内で、イエス・キリストの救いを宣べ伝えたのです。そのような使徒たちを神殿当局が見過ごしにする筈がありません。

ペトロと使徒達は、捕らえられて、牢に入れられますが、天使に助けられ、再び境内で、イエス・キリストを語っては、捕らえられ、最高法院で尋問を受けました。そこでも彼らは

「**人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。**」

と大胆にキリストを証しました。

ガマリエルの仲裁によって、彼らは鞭打たれた後、

「イエスの名によって話してはならぬ。」と命じられ、釈放されますが、彼らはそのようなこの世の権力に屈することなく、イエスの名のために辱めを受ける程の者にされたというふう喜んで、5章42節に記されていますように、

「毎日神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた。」

のでした。

教会は、外に向かって、聖霊の導きと助けで一致して、一步も引く事はありませんでした。しかし、内側はまだ、陣容が整ってはいませんでした。そのために問題が起きました。

6章1節に、

「そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシャ語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。」

とあります。その頃というのは、聖霊降臨のペンテコステからは、だいぶ時間が経った頃で、1～2年は過ぎていたであろうと言われます。イエス・キリストの救いの福音は、真実に神様に向かい、救い主を心から待ち望んでいた人々の心を捉えました。

ところで、イスラエルという国は、歴史的に、バビロン捕囚を経験し、先祖が異国の地に住み着いてしまった人々が居り、紀元前63年には、ローマのポンペイウスのエルサレム占領により、多くの人々がローマに、捕虜として連れて行かれましたが、後に解放され、そのまま、その地に住み着いた人々もいました。他にも、仕事や学問のために、イスラエルを出て、地中海世界で活躍をした人々が沢山いました。そういう人達を離散の民、ディアスポラと呼びました。

あのペンテコステの頃、ユダヤ人は本国に居た人々よりも、ディアスポラとなって地中海世界に出て行った人の方が多かったと言われます。そのような中で、本国に帰ってきた人々も沢山

いました。彼らは、地中海世界の公用語であるギリシャ語を使い、地中海世界のヘレニズム文化を身に付けていたことから、ヘレニストと呼ばれました。

一方、イスラエルから外へ出た事の無いユダヤ人も、彼らに共通することは、

『自分たちは、創造主なる神様に選ばれた選民であり、神様の約束のメシア・救い主を待ち望む』

ことに於いては、同じ信仰を持っていました。

その中から、使徒たちの説教によって

『十字架に架かり、復活されたナザレのイエス様こそが、神様の約束の、真のメシア救い主だ』

と信じた人が大勢起こされました。ギリシャ語を話すユダヤ人もヘブライ語を話すユダヤ人も双方共に、教会共同体のメンバーに加わりました。彼らは最初は、地のユダヤ人も、ディアスポラのユダヤ人も、何の違和感もなく、唯イエス・キリストを信じ、救われた事で喜び合いました。その喜びと、聖霊による愛から、同信の困窮者支援のために、持てる人々は喜んで、必要以上の家や土地を売って、使徒の足もとに持って来ました。つまり、献金しました。そのお金に依って、困窮者支援が行われ、

「教会には誰も、貧しい者がいなかった。」という、とても美しい共同体になったのでした。

しかし、そのような麗しさは、長くは続きませんでした。地上の教会は、救われた罪人の集まりであり、何処までも聖霊への服従無しに教会の聖め、聖化はありません。問題の一つは、ギリシャ語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して、苦情が出ました。それは、日々の分配のことで、仲間の寡婦達が軽んじられていたことに対するものでした。教会内には、早、2つのグループが出来ていました。それは、ギリシャ語を生活言語に使い、地中海世界の文化、思想を身に付けた人々で、ヘブライ語も理解する事の出来る人々と、イスラエル本国から出たことがなく、ヘブライ語、厳密には、アラム語で育ち、アラム語が生活言

語で、ギリシャ語が話せない人々の、2つのグループです。相手が使う言葉を自由に話せないと言うのは、互いを理解し合うのに、一番の壁になります。

宣教師は何よりも、宣教地の言葉を学ぶと言う事が、最重要課題になっています。しかし、問題は言葉が通じないというだけではなくて、教会が教会として成すべき、寡婦への日々の分配で、グループの違いから、差別があったという事です。この時の係は、どうも、地のユダヤ人達で行われていた様です。仲間意識というのは、一見、良さそうに聞こえますが、

『自分達の好みに合わなければ、
排除する』

という心が潜んでいます。寡婦にとって、最も切実な、日々の配給を、

『自分達の好みによるサジ加減で、
増やしたり減らしたりする。』

という事は、神様の前に生きているとは言えません。この世の支配下に戻った姿です。

そのような不誠実は、指摘されて当然でした。ギリシャ語を生活言語とするユダヤ人は、この問題を共同体の統括責任者である使徒達に訴えました。そこで、使徒達は、どう対処したでしょうか。彼らは、訴えの正当性に対して

『そんな事をする事は、キリスト者として、
あるまじき事である。一体誰が
そんな事をしたのか。』

と言って、犯人捜しをしたのではありませんでした。犯人捜しは問題の解決方向を見間違わせるものです。そこで、提案された方法は、6章2節に、

「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、
食事の世話をするのは、好ましくない。」

詳訳聖書では、

「私たちが食卓に仕える、食物の分配を監督するために、神の言葉の説教を止める、疎かにすることは、良くありません。望ましくありません。正しくありません。」

と訳されています。

使徒達はこの時、力を尽くして、唯、御言葉

一途に、イエス・キリストの福音を語ることに、集中していました。彼らは、自分たちの使命は、この一事に尽きることを自覚していました。使徒達が、ひたすら聖霊の導きを求め、御言葉に仕えようとしていたことの表われは、自分たちが教会の頂点に立って、自分たちの意に従わせようとはしなかったことです。彼らは、教会の頭はキリストである。皆、キリストに仕える、一人一人であり、それぞれ神様から与えられた、賜物に従って、仕えるべきであると考えていました。

そこで、3節に、一つの提案が出されました。

「兄弟たち、あなたがたの中から、霊と知恵に満ちた評判の良い人を7人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。」

と提案しました。聖霊は勇気を与え、人を造り変えて下さるお方ですが、その意味は、

『その人のそれまでの人生で、身に付けてきたものを、神様の栄光を現すように、磨いて成長させて下さる。』

という意味です。

ここでは、寡婦に対する公平な分配が、問題として取り上げられましたが、それはただ、公平に分配すれば良いと言うものではありません。寡婦達、つまり、最も弱い立場の人々が、尊ばれ、それこそ、教会のために、祈りの奉仕に喜び励むような日々が送れるようにしてあげることです。そのような配慮が成されるためには、聖霊に満たされていること、つまり、愛に満ちていることです。それだけでなく、知恵に満ちていること、つまり、賢明な知恵を働かせ、機転を利かせることです。評判の良い人とは、つまり、皆に信頼され、慕われている人のことです。そのような人物が求められました。これらの要件は、私たちの目指すべき奉仕者の資質です。聖霊を求め続け、従い続けるなら、聖霊がその資質を磨いてくださるでしょう。求められた7人というのは、町の代表者など、7人というのが一般的だったそうです。

使徒達は、働きの分担を明確にして、

「わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に

専念することにします。」

と宣言しました。5節を見ますと、

「一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンティオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、使徒たちの前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。」

とあります。

選ばれた7人は皆、ギリシャ風の名前の人達です。彼らは喜んで、その任に当たりました。特にステファノとフィリポは、御言葉を語る賜物もあり、大胆にイエス・キリストを証しました。

7節を見ますと、エルサレム神殿内で語った、御言葉は、神殿に仕える一般祭司たちの心も捉えて、祭司の中からも、キリストを信じる人々が多く起こされたのでした。

教会もこの世にあって働くのですから、数々の問題が起こります。しかし、問題が起こる事を悲観的に考える事はありません。聖霊は教会の未熟なところを問題に依って明らかにし、教会が聖霊の導きと助けを求めて、御心に適った解決へと、努力して助け合い、修復して、更に前進して行くように導いて下さいます。

ただ、教会が何時も忘れてはならない事は、**教会の使命は、イエス・キリストの福音を証し、キリストの愛を、現して行く事**です。ここが**土台**です。私たちの教会にも、問題は起こります。しかし、それは、教会が更に、御心に適う教会に、成長して行くために、与えられるものです。どんな問題も、イエス・キリストの福音を証し、キリストの愛を現すためには、この問題をどう解決していったら良いのだろうか、特に、役員の方々は、聖霊の助けと導きを求めて、問題收拾に当たって戴きたいと思います。

教会の頭はキリストです。Iコリント12章に、『**一つの体、多くの部分**』

とありますように、私たちはキリストの身体の部分部分です。しかし、この身体ほど、一つ一つの働きが違うにも拘わらず、調和と統一が取れているものはないのです。

イエス様は昇天されましたが、**教会のかしら**として、神の右の座に就いておられます。地上に、ご自身の**身体として残されたのが教会**です。私たちはその事を忘れないで、聖霊によって一つにされている事を忘れず、分に依じて、教会に仕え、イエス・キリストを証し、キリストの**愛を表していく**ことを、**使命として果たしてまいり**ましょう。

お祈りを致します。

天の父なる神様

私たちにイエス・キリストの御救いをお与え下さり、キリストを頭とする、身体なる教会に連ならせて下さり、感謝致します。

この地上を旅している間は、この教会にも様々な問題が起こりますが、聖霊の導きに依う時、その事を通して私たちを成長させ、教会を前進させてください。

一人ひとり、キリストを証していく事を使命として、分に依じて教会に仕えて行く者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。